

# 研究結果報告書

## 研究結果

### 日本語教育における類義表現の研究 —台湾人日本語学習者を対象に—

従来の先行研究では、「だろう」に関するモダリティ表現の研究がたくさんあるが、主に「推量」、「確認」、「疑念」などの用法に重点を置き、「だろう」の基本的な性質や他の表現形式との異同について論じている。しかし、日本語学習者が混乱しやすい「だろう・だろうか・のだろう・のだろうか」の類義表現の比較・分析を主とするものは少ない。また、既存の日本語教材において、初級段階では「だろう」（推量）と「だろうか」（疑念）の基本的な意味用法を提示しているが、中・上級段階では、文章や談話に多く現れる「のだろう」、「のだろうか」、「のではないだろうか」などの文末表現を学習項目として取り上げ、詳しく説明したものは非常に少ないのである。そのため、日本語学習者がこれらの類義表現を正確に理解・使用することは困難である。本研究は、これまでの先行文献で取り上げていなかった類義表現「だろう・だろうか・のだろう・のだろうか」を中心に、文章や談話などの言語資料を分析対象として、語用論的な観点から四項目の指示領域および使用場面の差異について考察する。また、アンケート調査を通して、台湾の日本語学習者の習得状況も明らかにしたい。

本研究は、「だろう・だろうか・のだろう・のだろうか」各表現形式の使用状況を把握するために、四項目を含めた文章や談話における用例を150例収集した。用例分析を通して、文脈における意味や共起表現を分析し、四項目の表現機能や使用場面を整理した。用例分析を進めると同時に、日本語学習者の習得調査も行う。調査方法としては、中級～中上級レベルの台湾人日本語学習者(100名)を対象にアンケート調査(文法テスト形式)を実施し、日本語学習者の「だろう・だろうか・のだろう・のだろうか」の使用状況および学習上の問題点を明らかにする。調査結果から見て、全体の正答率が5割しかなく、各問題の回答状況を詳しく分析すると、学習者が「だろう・だろうか・のだろう・のだろうか」の四表現形式に対する概念が混乱していることが分かった。特に、同じ推量を表す「だろう」と「のだろう」の違い、および同じ疑念を表す「だろうか」と「のだろうか」の違いを区別できない学習者が5割も占めている。また、疑念の用法では疑問詞を伴うとき「か」がつかない場合があるということを知らない学習者が7割以上超えている。中級～上級教材においては、よく文章で「だろう・だろうか・のだろう・のだろうか」の四表現形式を目にするが、学習項目として取り上げ、各表現の意味用法の異同について触れる教材が非常に少ないのである。教材の不足を補うために、本調査結果に現れた問題点に対して、具体的な指導案を考える必要がある。提案としては、本研究で取り上げた四項目の表現機能一覧表を提示し、具体例を示しながら文話における6種類の表現機能(推測・想定、疑問、説明・解釈、疑問・追究、問いかけ、疑い・反語)を説明する方法が考えられる。同時に、「疑問」の用法では、疑問詞を伴うとき「か」がつかないことがある、また、「(の)だろう」と「(の)だろうか」には、「のだ」の有無により「説明」と「強調」という性質が働いているという概念を理解させる必要もある。以上の基準で四項目の使い分けを説明すれば、学習者の理解にとっては効果的であろう。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表(発表者名・題名・会議名・日時・場所等)

1. 黄鈺涵・類義表現「だろろう・のだろろう・だろろうか・のだろろうか」に関する考察・2010日本語教育国際大会・2010年8月・台湾
2. 黄鈺涵・類義表現「だろろう・のだろろう・だろろうか・のだろろうか」の語用論的分析・2011日本學研究創新研討會・2011年6月・中国

論文(発表者名・題名・論文掲載誌・掲載時期等)

1. 黄鈺涵・台湾の高等教育における日本語教育 - 台湾大学の第二外国語を例として -  
・台大日本語文研究21号・2011年6月(掲載)
2. 黄鈺涵・類義表現「だろろう・のだろろう・だろろうか・のだろろうか」の語用論的考察・台大日本語文研究22号(審査中)

書籍(題名・著者名・出版社・発行時期等)